なっちゃん隊 深掘りレポート　Ｖｏｌ．５　帯広の商店街（闇市）

ＮＨＫ朝ドラ「なつぞら」で、広瀬すずさん演じる主人公なつが、泰樹じいさんと一緒に買い物をした帯広のヤミ市。終戦の混乱の中、人々の暮らしを支えたマーケットや市場はどのように誕生したのでしょうか。振興局なっちゃん隊が調べてみました。

昭和５年（1930年）に改装された帯広駅は、私鉄を合わせて５本の鉄路を有する東北海道一の交通の要所でした。今も帯広の顔として賑わう藤丸百貨店が駅の北側に開業すると、駅前から藤丸百貨店までの西２条通りは繁華街として発展していきました。

しかし、第２次世界大戦の戦火が広がると、街は次第に戦時色が強くなり、終戦直前の昭和20年（1945年）７月には市街地の建物疎開によって、多くの住宅地やマーケットが撤去され、街の中心部は広い空き地となりました。

終戦を迎えると、中心部の空き地は、バラックのヤミ市に変わっていきました。藤丸百貨店そばで、現在はアーケードの商店街となっている広小路では、引き揚げ者や戦災者が戸板を並べて商売を始め、電信通や大通、帯広駅前にも次々と新しい市場が誕生しました。

しかし、戦後の混乱が落ち着いた頃には、多くの路上マーケットは姿を消し、昭和27年（1952年）には帯広開基70年・市制20年を記念する式典も行われ、戦後の復興に一区切りがつきます。その後は社会インフラの整備も進み、帯広中心部の町並みは整備されていくのでした。

※写真　帯広の百年－帯広市開基百年市制施行五十年記念事業－より引用（発行：帯広市）